



おかげさまで設立60周年を迎えました

資本は「人」、モノづくり回帰で経営サポート

非破壊検査機器のメーカーであり、専門商社でもあるポニー工業が、4月に創立60周年を迎える。わが国のインフラや産業基盤を支えてきた同社は、さらなる成長を目指しAI(人工知能)など新しいテクノロジーや、海外市場への進出も視野に入れる。60年の歩みと、今後の戦略などについて、猿渡保社長に語ってもらった。(聞き手は拝原泰介 日刊工業新聞社取締役西日本支社長)



代表取締役社長 猿渡 保氏

海外のネットワークが強み

「ポニー工業は1965年に会社を設立しましたが、まずガンマ線透過試験装置を製品化しました。」

「非破壊検査用のイリジウム線源が国産化されたことを受け、製品化に踏み切った。ピーク時は年間100台ぐらい売れ、かつては競合メーカーもあったが、今では当社だけが販売を続けている。ガンマ線源による非破壊検査のエポックとしては60年以上となる東海道新幹線の建設時、レール間の溶接部分を検査した事である。建設当時は新幹線の沿線で電源を確保するのが難しく、キロワットオーダーの電力が必要なX線装置も使えなかった。現在ではビジネス規模も小さくなってしまったが、防爆対策が必要なプラント検査ではまだ使われており、お客さまのためにもガンマ線透過試験装置の製造を今後も継承しないといけない。」

「メーカーでありつつ、非破壊検査の機材を専門に扱う商社でもあります。」

「もともとメーカー的な部分はガンマ線透過試験装置ぐらいで、主に専門商社として歩んできた。当時は非破壊検査分野で専門商社は存在せず、ユーザーはメーカーの直販で機器を購入したり、必要な機材を工具業者で調達したりしていた。しかしメーカーは自社製品のことしか分らないし、工具業者は急なメンテナンスなどに対応できない。そこで当社があらゆるメーカーの製品をそろえ、

事業拡大へ教育重視

「今後の事業の課題は何でしょう。」

「海外市場にも将来は乗り出したい。現在は海外メーカーからの輸入はしているが、日本からの輸出も実現すれば、わが国の非破壊検査業界の発展につながる。特

システムがないか調査し続けてきた。欧米では業界内で仲間意識が日本以上に強く、そこでのネットワークを構築できていることも強みとなっている。」

「現在の業績はいかがですか。」

「(今期(2025年3月期))は創業以来最大の売上高を達成できそう。例えば、防衛費の増加で防衛産業への需要が拡大しているが自動化や省力化を進めないと増産できないため、新しいシステムが求められている。当社では多品種少量生産での検査を自動化できるアームロボット式の超音波探傷検査システムや、トラックに後方散乱X線検査装置を搭載し大型コンテナ等の内部を映像化できる車載式検査装置などの受注が好調だ。」

に東南アジアは、経済発展で建設が進んだ建築物の検査などニーズが出始めている。日本と自然環境など条件も似通っており、可能性はある。」

「モノづくりへの回帰を進めたい。メーカーとしての自社製品は大半がアウトソーシングで製造している。しかし自動化や省力化への顧客ニーズに応えていくには、これまで以上に特殊なものを手がけていかなければならない。そのためには自前でのモノづくりによりノウハウを積み上げていく必要がある。」

「ポニー工業の強みは何でしょう。」

「当社にとって資本はやはり『人』。非破壊検査に関わる有資格者の数も商社としては圧倒的だ。150人ほどの社員数だが、



1984年ごろのカタログ。米国TEXAS NUCLEAR社製(現場用携帯形)9266型蛍光X線分析計。現在スクラップ業界などで多く使用されているハンドヘルド型蛍光X線分析計のはり的装置だった。



2022年(令和4)にリニューアルした熊取工場(大阪府熊取町)